

平成 29 年 6 月 11 日現在

機関番号：35403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26350028

研究課題名(和文) 重森三玲の作庭を巡る庭園計画における制作理論と制作手法の展開に関する研究

研究課題名(英文) Study on the expansion of production theory and production method in the garden planning surrounding the work of Mirei Shigemori.

研究代表者

河内 浩志 (KOUCHI, HIROSHI)

広島工業大学・環境学部・教授

研究者番号：20195663

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000 円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、先ず、重森三玲の捉えていた言説の意味を明らかにすることで、彼の作品制作思想の一端の解明を行ったことである。次に本研究の実測調査やインタビュー調査は、重森三玲の作庭作品や建築作品や、制作理論の関係性の確立を目指す為に重要になるものであり、庭園作品制作の傾向を探るうえにおいても重要な位置付になった。成果の特徴は、3つの段階に分類される自然観を通して、重森が目指していた庭を制作する行為が、作品に自己の生命を込める行為であることが引き出したことである。この「自然」に対する思想は、「永遠のモダン」という、重森三玲の作品制作への理念へと関連していると考えられる。

研究成果の概要(英文)：First, the result of this research is to reveal a part of his work production theory by clarifying the meaning of the descriptions of Mirei Shigemori. Next, the actual survey and interview survey of this research became important to aim for establishing the relation between the garden works of Mirei Shigemori, the architectural works, the production theory, and to searching for the tendency of the garden production. The characteristic of the result is to draw out that the expressed garden is existence of himself through the viewpoint about "Nature" that is classified in three stages. This concept of "Nature" seems to be related to the thought of Mirei Shigemori's "Eternal modern".

研究分野：複合領域(デザイン学)

キーワード：環境デザイン 重森三玲 庭園計画

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、重森三玲の「景観・環境」デザイン関連の研究動向は、学術的研究は数少ないという現状であった。例えば日本建築学会大会梗概「雪舟による萬福寺庭園の作庭手法：重森三玲による水墨山水画との比較考察を通して」 関本佳奈・真木利江著，2006, pp.733-734.と、日本造園学会全国大会研究発表論文集「枯山水庭園の新様式に関する研究」 クリスティアン・チュミ著，2003, pp.413-416.等の制作手法に関わる報告等が、僅かにされているに過ぎない。本研究の位置づけは、重森三玲の個々の計画作品における制作理論と制作手法を通して、その両側面を考慮した意味の全体的枠組構造の探求が特徴である。また、本研究は、ランドスケープデザインの制作理念・造形理念の探求にも通じ、環境・建築デザインの近代化に伴う建築思潮の形体的・感性的な制作的観点の問題の根底を開拓し、調和ある歴史的景観構成や現代環境デザインの合理性・実用性の計画的観点へと展開させることを視野に入れて遂行した。

2. 研究の目的

(1) 全体構想の要旨

本研究の全体構想は、ランドスケープデザインの歴史的視点から、重森三玲に注目し、彼の作品や文献を「庭園・景観計画」の事例として、多様に存在する彼の個々の庭園・景観の計画（作品）と制作理論・制作手法の展開を分析し、その歴史的な変遷を検討することを通して、環境デザインや「ものづくり」に関わる計画（作品）におけるその制作理論と制作手法の意味の全体的枠組の構築を目指すものである。

(2) 具体的な目的の要旨

本研究の具体的な目的は、「景観・環境デザイン」において不明瞭な制作理論と制作手法の関係の全体的枠組に関して、重森三玲に注目し、作庭作品や文献の調査に即してその制作理論と制作手法の個々の変遷過程を辿ることで、それらの意味の全体的構造を明らかにすることである。手続としては、先ず、ランドスケープデザイナーの先駆者でもある重森三玲の計画実施作品と著述の個々の調査・整理・検討を通して、彼の「庭園計画における制作理論と制作手法」の変遷における諸問題が、計画者自身の内奥の事柄も含めながら導出される。次いで、その内容の解釈を通して、その意味の全体的な枠組構造が抽出される。このことは、「景観計画」や「環境計画」、デザイン(教育)の問題を考える上において、公共建築物などの整備や管理においても、人間と環境と建築をデザインとして密接に連携し、美しい景観づくりの具現化にも直結する。

重森三玲を通して、「景観・環境」の制作理論と制作手法の応答関係を探ることは、重森三玲の「景観・環境」デザインの思想的背景を探ることでもあり、彼の心象風景の内面的意味の構造化が促進することになる。

また、重森三玲は、24歳で日本美術学校研究科を卒業するが、26歳の時に「文化大学院」の創設を企図し、通信講座による講義をはじめ、自らも講義を担当することになった。この構想は、1年後の関東大震災で挫折することになるが、当時の講義録である『現代美術思潮講義録』と『現代哲学思潮講義録』は、彼の「制作術」の根本に据えられている可能性がある。本研究は、重森三玲の「制作術」と作庭作品や建築作品、制作理論の対照的關係性の確立を目指すものであるが、作品制作の傾向を探るうえにおいても震災以前・以後は大きな変換点と位置付けられよう。これらとの応答関係を探ることは、重森三玲の大きく揺さぶられた青年期の思想的背景を探ることであり、その時期の重森三玲の「制作術」を明確にすることになる。

3. 研究の方法

(1) 具体的な研究方法の要旨

以下の①～⑤に沿って進めた。

- ① 重森三玲の作庭作品や建築作品の実施作品を含む文献資料の調査。
- ② 上記の調査資料の整理、分析。
- ③ 「景観・庭園の制作手法と制作理論の展開」に示される理論的枠組みの展開の抽出・検討。
- ④ 「制作手法と制作理論の展開」に示される外的要因と内的要因の意味の類型化と構造化。
- ⑤ 「景観・環境」デザインにおける「制作手法と制作理論」の理論的枠組みの設定。

また、本研究は、さらにより具体的な進め方（方法）として、重森三玲が、実用的で合理的な作庭や建築を追及すると共に、芸術家の「精神的風景」として、人間存在そのものに関する「作品制作」を追求していることから、この問題に対する資料を収集し、重森三玲の作庭家・建築家としての「意匠心」とも言うべく「合目的性を超えた意匠の世界」の視点から、「景観・環境」デザインの内面的性質を探ることになる。対照される文献資料としては、例えば『庭、作る楽しみ・見る楽しみ』や『庭、こころ、かたち』等々の著作資料から、「形と心」の心的交流の問題に関心が向けられ、その問題を重要視してきた重森三玲の特徴についてさらに詳しく精査を行った。

特に「景観・環境」デザインには、作品の実体的な側面としての「外面的性格」と、人間の内的風景とも言える「内的性格」との2つの「制作理論と制作手法の展開」を考える必要がある。先行する既存研究をさらに展開し、重森三玲が、この2つ性格の「制作理論と手法」をどのように連携し展開させて

いたかを、諸種の問題点に着目してみていくことになる。やや冒険的に言うならば、「重森三玲の景観・庭園における制作理論と理論手法」で重要なことは、視覚的に「見える形」を通して、本質的な「見えない形」を如何様に主題化しようと試みたかということであろう。視覚的に「見えない形」へのアプローチは、本来的に「見えざるものの形」を探ることになる。重森三玲にとって「人間の心」・「精神的なること」は、制作原理の拠り所としての「超越的な事柄」の根底層を探索することである。

(2) 具体的研究内容

平成 26 年度中は、各地に散らばって現存する重森三玲の作庭作品や建築作品の実施調査等を中心としながら、同時に、文献資料調査も並行して行い、文献実証的な立場から検証考察を行った。作庭作品としては、和歌山県高野山の西南院、桜池院、正智院、西禅院、福智院、光臺院、本覚院、さらに、岐阜県美濃加茂市の正眼寺観音像前庭、長野市若穂綿内の北野美術館、長野県木曽町福島の興禅寺看雲庭、長野県松本市出川町の中田家庭園等の実測調査とインタビュー調査等を中心に行った。文献資料としては、高野山教育委員会、名古屋市立舞鶴図書館等々で図面や著書について収集を行った。

平成 27 年度中は、豊國神社、林昌寺、桜池院、福智院、愛染庭、松尾大社、東福寺本坊、光明院、重森三玲庭園美術館等の調査とインタビューを中心に行なった。「重森三玲の作庭を巡る庭園」に関する庭園調査を実施することにより、重森の庭園の実態把握、記述資料の収集、インタビュー等を行い、それらの庭園の計画を分析し、制作理論と制作手法の解明に向けて、作庭問題の所在を明らかにした。

平成 28 年度中は、重森三玲の設計作品である茶室「犀庵」(金沢県立能楽堂敷地内移設)、光明院庭園「波心庭」・茶室「羅月庵」、東福寺本坊庭園、重森三玲庭園美術館、泉涌寺等への調査とインタビューを中心に行った。同時に、重森三玲の庭園研究対象地であった兼六園、金地院、平城宮跡東院庭園等の古庭園に対する実測調査とインタビュー調査等を行った。調査と並行して「制作理論と制作手法」の展開を辿ることも行った。著述を多数残している重森の文献資料の精読や当時を知る関係者へのインタビューを行うことで、彼の作庭の捉え方を庭園調査ばかりでなく、彼の庭園思想の分野へも拡張して、その作庭術の理論的枠組みの検討が出来た。これらの理論的枠組みからは、重森三玲の「景観・環境」デザインに関わる内面的な深層の心象風景の影響関係も探られる。それらの意味の類型化の中から、「制作手法と制作理論の展開」の外的要因ばかりでなく、内部的にとらえた心象風景の深層として、「制作理論と制作手法の展開」の意味の構造化が行われ、検証考察を続けながら結果が纏められた。

4. 研究成果

(1) 作品制作理念について

本研究の成果として、重森の記述より、彼の捉えていた言説の意味を明らかにすることで、彼の作品制作思想の一端の解明を試みた。本研究では、文献の記述のなかの意味を対象とし、そこに重森三玲の表現した言説の意味の構造化を行ってきた。また、本研究の実測調査やインタビュー調査は、重森三玲の作庭作品や建築作品、制作理論の対照的關係性の確立を目指す為に重要になるものである。特に、庭園作品制作の傾向を探るうえにおいても重要な位置付になる。

これらの対照的關係を探ることは、重森三玲の庭園制作術の意味を明確にすることになる。重森三玲の作庭作品と建築作品の調査に加え、文献調査における外面的・内面的な両性格の検討を通して、それらの「制作理論と制作手法の展開」の意味の類型化と構造化が図られる。特に、「自然」に関する言説を通して、重森の目指していた庭を制作する行為は、作品に自己の生命を込める行為であることが引き出された。具体的には、以下の 3 つの段階の「自然」観によって分類される。

- ①「自然」は、人間の手が加わっていない事柄である。神のみが自由になし得、人間をも支配し含んでいる。神が作った「大自然」と表現され、神そのものとして崇拜や畏敬の対象となる。
- ②「自然」は、人間が、①の「自然」を模倣し、写実することによって作られた庭園である。人間が①の「自然」を「直訳」して表現したものである。美的感覚を含んでいるが、芸術行為以前の段階である。
- ③「自然」は、人間が、②の「自然」に対し、「創意的内容」を加えた庭園である。「言葉に表われぬ余情」や「目に見えぬ景色」を含む点で芸術となる。人間が、①の「自然」を「意識」して表現したものであり、人間と神の共同作品である「超自然」と表現される。

この「自然」に対する思想は、「永遠のモダン」という、重森三玲の作品制作への理念へと連関している。「モダン」という重森独特の理念は、重森三玲初期の著作から見られるものではなく、1958 年出版の『庭 作る楽しみ見る楽しみ』により初出し、古庭園の調査や作品制作等を通じて徐々に導き出されたものであると考えられる。神が制作した「自然」が、神そのものとして崇拜されるように、重森が制作した庭は、彼の作品であると同時に、彼の生命として捉えられた。「永遠のモダン」とは、彼が庭園作品に込めた自己の生命を指しており、作品を通して永遠性を目指していたと考えられる。こうした背景のもとに、重森の残した作品や文献を対象資料とし、重森三玲の作庭思想を解き明かすことで重森三玲に対する再評価を行い、議論に一石を投ずることに重要性がある。

(2) 作品制作手法について

重森が制作した庭園作品において、その特徴として取り上げられる「市松模様」の意匠を用いた作品は、「東福寺西庭・井田の庭」「東福寺北庭」(1939年)、「漢陽寺庭園」「福智院愛染庭」(1974年)の4作品である。特に、東福寺庭園は、世間へ重森三玲の名前を知らしめた初期の代表作であるとされる。さらに、光明院波心の庭に見られる配石手法は、重森独自の創作であることが彼の記述からも明らかである。これらの言説から光明院波心の庭は、重森初期の作品でありながら創作的な立場での作品であり、観賞者の視点を踏まえた作品であることが伺える。この「光明線」という石組の手法に着目し、市松模様の意匠が用いられる4庭園を概観すると、1974年に制作された福智院愛染庭においては、明確な線が出ていないものの、築山上部の三尊石から発せられる石より「光明線」を見出すことが出来る。

制作思想研究として取り出された「モダン」の性質として、制作者の「創作」によって「永遠性」を獲得することが出来ることが挙げられ、ここでの市松模様は、神の制作した「大自然」を乗り越え、「超自然」の域へと到達するために用いられたことが明らかとなった。これらの市松模様を用いた狙いが「永遠のモダン」であることを踏まえ、2つの年代の差異性について考証を行った。

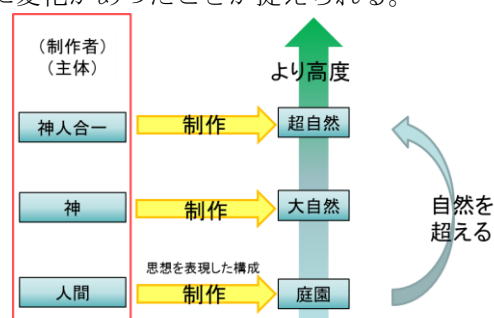
- ①重森の「市松模様」は、「永遠のモダン」という言説に関わり、特に後期において「神」と関わる事柄として捉えられる。重森にとって作品を「芸術」として引き出すために「自然」を超えた「超自然」の領域に踏み込むことが必須であった。そのために制作者である人間は「神」と対峙し一体となることではじめて「神」の創作した「自然」を超えることが出来る。重森の思想は晩年において、「神」をただ崇拝し崇める対象として捉える立場から、「大自然」を「創作」した「制作者」として捉えるように移り変わる。こういった変化の下に、晩年の作品も「神」への意識が強くみられる。
- ②重森の庭園作品に見られる市松模様の意匠は、初期においては石組とは独立した人工的な意匠として用いられているが、後期においては石組を市松模様内に用いる点や、「築山」のような自然を模した意匠と同時に用いられる。また、重森が用いていた「光明線」という石組の手法に着目すると、「人工的な市松模様による造形」と、「自然を模した築山の造形」の両者を貫くように配石されている。重森にとっての石組は、「人工」と「自然」の両者に跨り、繋ぐ要素として扱われ、石を組む行為によって「神」と対等に対峙し、「神」の創り出した「自然」を超えようとしていた。

結果は、上述①②の通り、彼の作品制作思想が「市松模様」の作品制作手法の変化へと影響している点が考察として導き出された。

(3) まとめ

本研究の成果として、重森三玲の捉えていた言説の意味を明らかにすることで、彼の作品制作思想の一端の解明を行った。また、本研究の実測調査やインタビュー調査は、重森三玲の作庭作品や建築作品、制作理論の関係性の確立を目指す為に重要になるものであり、庭園作品制作の傾向を探るうえにおいても重要な位置付になる。思想の変化の時期を考察する一例として、重森三玲は78の著作のうちで「鑑賞」「観賞」の語を意図的に区別して用いている。1946年頃までにあたる初期の時期においては、主として「鑑賞」の語が用いられ、1964年頃までにあたる中期においては「観賞」の語が用いられる。その後、1975年までの晩年にあたる後期では「鑑賞」「観賞」の両者が同時に用いられている。これらの変化には重森の「自然」に対する思想の変化が推察され、「大自然」を創作した「神」と、「自然」を操作する芸術家の立場や関わり方について、多くの記述を残すようになる。晩年の重森は、庭園制作において「神」の制作した「大自然」を芸術家は超えていかなければならない、「神」と「芸術家」が対等な立場で協力して作品を創作する必要がある、といった記述を残し、庭園制作を行っていた。

このように重森三玲の作品制作思想は、大きく転換する事こそないものの、時間の経過につれて深化しており、「自然」に「神」という主体を見出すようになる。同時に庭園を「鑑賞」し「観賞」する人間の立場や、庭園を創作する芸術家の、庭園との関わり方が変化していくこととなる。こういった変化の契機は定かでないものの、重森の捉える自然観に変化があったことが捉えられる。



(図1：構造化した「自然」に関する言説)

特に、上述した3つの段階に分類される自然観を通して、重森が目指していた庭を制作する行為が、作品に自己の生命を込める行為であることが引き出された。重森は「石を組む」行為によって「神」と対等に対峙し、「神」の創り出した「自然」を超えようとしたのである。「市松模様」の手法は、石組や築山といった自然の要素と組み合わせることによって重森の「永遠のモダン」を実現させるための要素であった。

この「自然」に対する思想は、「永遠のモダン」という、重森三玲の作品制作への理念へと連関していると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 7 件）

- ①上野友輝, 河内浩志, 重森三玲の「自然」に関する記述を巡る思想について, 日本建築学会中国支部研究報告集 40, 査読無, 903-906, 2017
- ②上野友輝, 河内浩志, 重森三玲の記述における「大自然」について, 日本建築学会学術講演梗概集(建築歴史・意匠), 査読無, 251-252, 2016
- ③上野友輝, 河内浩志, 重森三玲の庭園作品における市松模様の意匠について, 日本建築学会中国支部研究報告 39, 査読無, 1001-1002, 2016
- ④上野友輝, 河内浩志, 重森三玲の記述における「自然」について, 日本建築学会学術講演梗概集(建築歴史・意匠), 査読無, 343-344, 2015
- ⑤上野友輝, 河内浩志, 重森三玲の記述における「モダン」について, 日本建築学会中国支部研究報告 38, 査読無, 959-962, 2015
- ⑥上野友輝, 河内浩志, 重森三玲における茶室の構成について, 日本インテリア学会第26回北海道大会研究発表梗概集研究報告集(歴史Ⅰ), 査読無, 003, 2014
- ⑦上野友輝, 河内浩志, 重森三玲の記述における「象徴」について, 日本建築学会学術講演梗概集(建築歴史・意匠), 査読無, 535-536, 2014

〔学会発表〕（計 7 件）

- ①上野友輝, 河内浩志, 重森三玲の「自然」に関する記述を巡る思想について, 日本建築学会中国支部研究報告集 40, 903-906, 2017, 発表会場: 島根大学松江キャンパス(島根県・松江市), 年月日: 2017-03-05
- ②上野友輝, 河内浩志, 重森三玲の記述における「大自然」について, 日本建築学会学術講演梗概集(建築歴史・意匠), 251-252, 2016, 発表会場: 福岡大学(福岡県・福岡市), 年月日: 2016-08-24
- ③上野友輝, 河内浩志, 重森三玲の庭園作品における市松模様の意匠について, 日本建築学会中国支部研究報告 39, 1001-1002, 2016, 発表会場: 近畿大学工学部(広島県・東広島市), 年月日: 2016-03-05
- ④上野友輝, 河内浩志, 重森三玲の記述における「自然」について, 日本建築学会学術

講演梗概集(建築歴史・意匠), 343-344, 2015, 発表会場: 東海大学周南キャンパス(神奈川県・平塚市), 年月日: 2015-09-04

- ⑤上野友輝, 河内浩志, 重森三玲の記述における「モダン」について, 日本建築学会中国支部研究報告集 38, 959-962, 2015, 発表会場: 米子高専(鳥取県・米子市), 年月日: 2015-03-08
- ⑥上野友輝, 河内浩志, 重森三玲における茶室の構成について, 日本インテリア学会第26回北海道大会研究発表梗概集研究報告集(歴史Ⅰ), 003, 2014, 発表会場: 北海学園大学(北海道・札幌市), 年月日: 2014-10-26
- ⑦上野友輝, 河内浩志, 重森三玲の記述における「象徴」について, 日本建築学会学術講演梗概集(建築歴史・意匠), 535-536, 2014, 発表会場: 神戸大学国際文化学部(兵庫県・神戸市), 年月日: 2014-09-13

6. 研究組織

(1) 研究代表者

河内 浩志 (Kouchi, Hiroshi)
広島工業大学・環境学部・教授
研究者番号: 20195663

(2) 研究協力者

秦 明日香 (Hata, Asuka)
上野 友輝 (Ueno, Yuki)
福原 舞 (Fukuhara, Mai)
才峠 洋之介 (Sainoto, Yonosuke)
三好 亮 (Miyoshi, Ryo)
富久 亜以 (Tomihisa, Ai)
河内 文孝 (Kouchi, Fumitaka)
伊藤 聡一郎 (Ito, Soichiro)
伊藤 優 (Ito, Yu)
土井谷 潤 (Doitani, Jun)
森田 夏帆 (Morita, Kaho)
徳永 梨沙 (Tokunaga, Risa)